

所属	国際交流研究科 国際交流専攻 修士課程	修了年度	平成 28 年度
氏名	森 廉華	指導教員	松本 逸也

論文題目	日本における中国人留学生の歴史と今後
------	--------------------

本文概要

本論文は、現在、10万人に迫る日本に学ぶ中国人留学生のあり方、存在理由を歴史的な背景を探ることで未来に向けて提唱しようというものである。論文構成は、「はじめに」、4つの章、「終わりに」からなる。「はじめに」では、古来、アジアの先進国としての中国は、長く留学生を周辺国から一方的に受け入れる側であった。流れを変えたのは日清、日露戦争による日本の勝利だった。かつて留学生はエリートと呼ばれたが、今ではその存在価値が大きく変化した。第1章は、近代化した明治日本への清朝の熱いまなざしを記す。日清戦争で大敗を喫した清国は敵国日本に学ぶべき事があると認識、留学生を日本に送るきっかけとなった。さらに日本が大国ロシアに勝利したことで清朝政府の対日本観は尊敬に近いものとなった。第2章は、13人の1期生を送り出した清朝の留学生たちが日本を舞台に孫文の革命運動に傾倒、皮肉な結果を生んだことを指摘。その後、中華民国が成立。彼らは、国際情勢の中で変節する日本に滞在し時代の変転に巻き込まれて行く。魯迅からはじまって郭沫若、田漢、蒋介石、周恩来といった著名人の足跡を辿りながら日中戦争への流れを追う。医学を志した魯迅が途中から文学に傾倒し、後に中国近代劇の元祖となった田漢は中国の国歌「義勇軍行進曲」の作詞者となる。蒋介石も軍人目指して東京振武学校に留学。1910年、日本陸軍第13師団（現在の新潟県上越市）に配属されるが翌年、孫文の辛亥革命に参加、帰国する。中でも興味深いのは周恩来のこと。1917年、19歳で来日。東京高等師範学校を受験するが不合格。翌年、東京第一高等学校にも失敗。政治問題に熱を入れすぎ勉強が疎かになったことが理由のようであった。結局、周は1年半という多感な時期を日本で過ごした。その後、周はフランスに留学するが、短い日本滞在が後の日中関係にプラスの効果があったと多くの著書から論者は確信を得る。この章に登場する人物はその後の日中関係においてキーマンとなっている。わずかな滞日経験だが歴史に影響を与えたことがポイントと言えよう。第3章は、日中戦争後の中国人留学生の状況を記述。1972年、日中が国交を回復し翌年、戦後初の第一期公費留学生6人が来日。その中には先頃まで駐日大使を務めた程永華もいる。再開された中国人留学生の数は中国の経済成長とグローバリズムの波に乗り2015年現在、9万4111人に及ぶ。その中の一人がこの論文の筆者である。第4章は、留学生の歴史的な流れと自身の体験から、日中友好に果たすべき留学生の責任を熱く論じる。要約すれば歴史認識、人権等々、日中が抱える政治問題を解決に導くには何と言っても文化の力しかない、その文化の力の根源にこそ留学生が立たねばならないということに尽きる。留学生の数ではなくその本来の目的、存在理由を論者は問うのである。本文は大きく分けて2つの面から成り立っている。1つは1896年から1937年まで、近代化を成し遂げた日本に肉迫し貪るように知識を求めた時期。留学生の多くが政治、法律、軍事、教育、理工医を主に専攻。2つは国交を回復した1972年から2017年。この時期には経営・経済から環境、科学技術、文学思想が中心である。学問領域は、その時々時代の要請、とりわけ国家の要請に大きく影響を受ける。日本が日清戦争に勝利した時は軍事中心。今は経営・経済から環境問題まで幅広い。環境への関心の高さは工業化による大気汚染が中国社会の大きな問題になったからだ。半世紀前に公害問題を体験した日本からは学ぶことが多い。しかし、留学生の役割は単に専門的知識のみならず、今も昔も民族、国を超え、生身の人間として冷徹な政治を側面から支える文化力を持つことに尽きると論者は力説する。

[主な参考文献]

- ・段 躍中『現代中国人の日本留学』明石書店 2003年1月27日
- ・巖安生『日本留学精神史—近代中国知識人の軌跡』岩波書店 1991年11月
- ・大里浩秋、孫安石『留学生派遣から見た近代日中関係史』御茶の水書房 2009年